

れる。授業デザインの中には教員よりフィードバックを受ける機会が授業プログラムに含まれている。学習者の努力と達成に対する肯定的な気持ちが強化されたことが動機づけになったと評価した。

一方で「自信：Confidence」は中央値が3.3点であった。「自信：Confidence」は成功の体験を重ねることにより「やればできる」という確信・実感をもつことである。質問項目の「私はこの授業をうまくやる自信があった」、「この授業の内容は、私にとってあまりにも難しかった」の中央値が3.0点であり、オンライン授業に対してどのように学習に臨めばよいのか、うまく授業をやっている実感がなかったものと推察される。学習環境の変化に応じて学生が自分自身を統制し、オンラインでの学習に適応できるような支援や成功体験に気づけるようなアプローチに改善が必要であったと評価した。

V. 今後の課題

構築した授業デザインは学生の自己評価では学習目標到達を実感させるものであった。教員による他者評価との比較が今後の課題である。構築した授業デザインは学生の興味・関心をひきつけて、やりがいや満足感を得られることで動機づけることができた。しかし、学生は自信が持てない中でオンラインの実習に取り組んでいた可能性があり、オンライン上の学習における検討課題である。また、今回の授業デザインは結果

の整理までとなった。オンライン実習におけるデザイン原則の提案に向けて引き続き検討していく必要がある。

謝辞

本研究の主旨にご賛同いただき、貴重なデータをご提供いただきました皆様に心より御礼申し上げます。なお、本研究は2020-2021年度東京医療保健大学医療保健学部看護学科特別研究費の助成を受けて実施いたしました。

引用文献

- 1) 杉森みどり, 舟島なおみ. 看護教育学 第6版. 東京: 医学書院 2016; 254.
- 2) 鈴木克明, 根本淳子. 教育改善と研究実績の両立を目指して: デザイン研究論文を書こう. 医療職の能力開発. JSISH 学会誌 2012; 2 (1): 45-53.
- 3) 川上祐子, 向後千春. ARCS動機づけモデルに基づく Course Interest Survey 日本語版尺度の検討. 日本教育工学会研究報告集 2013; 13 (1): 289-294.
- 4) 大島純, 大島律子. エビデンスに基づいた教育—認知科学・学習科学からの展望—. 認知科学 2009; 16 (3) 390-414.
- 5) 赤堀侃司. オンライン学習における授業デザイン. AI時代の教育学会 研究会 論集2020; 1: 13-14.